

## 吉田松陰と竹島



杉原 隆

(島根県竹島資料室特別顧問)

はじめに

- 1 吉田松陰の竹島、松島
- 2 松陰の大坂島と竹島（竹嶋）
- 3 門下生桂小五郎（木戸孝允）の「竹島開拓建言書草案」
- 4 門下生境二郎（齋藤榮蔵）の「日本海内竹島外一島地籍編纂方伺」、  
「日本海内松島開墾之儀ニ付伺」

おわりに

はじめに

1858（安政5）年頃萩の松下村塾で、吉田松陰とその門下生の間に竹島開墾論が浮上した。同年2月19日付の桂小五郎（木戸孝允）宛の松陰の書簡には、「(前略) 天下無事ならば幕府の一利、事あらば遠略の下手は吾が藩よりは朝鮮・満州に臨むに若くはなし。朝鮮・満州に臨まんとすれば竹島は第一の足溜なり。」と直前幕府が蝦夷地に対して行った箱館開港等の施策に合わせて、長州藩に近い竹島の経済上、海防上の重要性を述べている。同年の7月12日の同じ桂小五郎宛ての書簡の別紙には松陰の認識する竹島像が記されている。すなわち、

竹島・大坂島・松島合せて世に是れを竹島と云ひ、二十五里に流れ居り候。竹島計り十八里之れあり、三島とも人家之れなく候。大坂島に大神宮の小祀之れあり、出雲地より海路百二十里計り。産物蛇魚類、良材多く之れあり、開墾致し候上は良田美地も出来申すべし。此の島蝦夷の例を以て開墾仰せ付けられれば、下より願ひ出で航海仕り候もの之れあるべく候<sup>1</sup>。

である。

1 山口県教育会編纂『吉田松陰全集』第八巻、大和書房、1974年、76頁。

江戸時代初期の文献、絵図の竹島（鬱陵島）と松島（現在の竹島）の間はほとんど40里とされており、松陰の認識の竹島、松島との25里は1840年刊行されたシーボルトの「日本図」以来の、イギリス船の測定の誤りで生まれたアルゴノート島を示す竹島、真実の鬱陵島であるダジュレー島の松島での距離であることがわかる。竹島の周回を示す松陰の認識18里は、松陰と個人的に交流のあった伊勢の松浦武四郎が鬱陵島の開拓の必要性を唱えて1854（安政元）年刊行した「他計甚麼雑誌」（竹島雑誌）<sup>2</sup>



吉田松陰「近世名士写真」  
（国立国会図書館蔵）

の古い竹島の16里に近い。「出雲地より海路百二十里計り」は後の資料に記される島根半島雲津から隠岐經由鬱陵島までの120里と合致する。

この吉田松陰には門下生として桂小五郎以外に斎藤榮蔵（境二郎）や高杉晋作もいた。斎藤と高杉の二人は安政5年7月桂を頼って江戸游学の途についた。斎藤は勉強に熱心だとして松陰が度々激賞した人物で、明治5年から島根県の官吏となり参事の時「日本海内竹島外一島地籍編纂方伺」<sup>3</sup>を、県令時代には「日本海内松島開墾之儀二付伺」<sup>4</sup>を中央政府に提出することになる。松陰自身は同年の12月いわゆる安政の大獄で逮捕され翌年処刑されたが、桂小五郎は師の意思を受け継ぎ、翌1860（万延元）年に村田蔵六（大村次次郎）と連名で「竹島開拓建言書草案」<sup>5</sup>を幕府の閣老久世広周に提出した。吉田松陰自身が竹島問題に関わった期間は短いものだったが、門下生によって現実的に取り組まれた史実や彼のいう竹島とは何かを以下に検討してみたい。

## 1 吉田松陰の竹島、松島

松陰が「竹島・大坂島・松島合せて世に是れを竹島と云ひ、二十五里に流れ居り候。」と書簡に書いた竹島、松島はアルゴノート島とダジュ

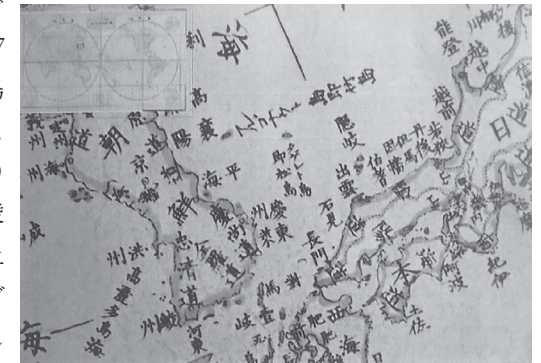
<sup>2</sup> 松浦武四郎伝刊行会『増補松浦武四郎』、三省堂、1966年、513頁。

<sup>3</sup> 『公文録』明治10年3月内務省之部（国立公文書館蔵）。

<sup>4</sup> 『朝鮮国蔚陵島へ犯禁渡航ノ日本人ヲ引戻処分一件』自明治14年至明治16年4月（外務省外交史料館蔵）。

<sup>5</sup> 木戸公伝記編纂所編『木戸孝允文書 第八』、日本史籍協会、1931年、8頁。

レー島の竹島、松島であろう。すなわち1787年フランス船が鬱陵島を測量しダジュレー島、1789年（一説には1791年）イギリス船が同じ鬱陵島を測量しながら海上の位置を誤ってアルゴノート島として表示した島がヨーロッパ地図



安政期の「万国全図」アルゴノート島（竹島）とタゲレト島（松島）が載っている。（個人所蔵）

に日本から持ち帰った「日本図」に古くから記載されていた竹島（鬱陵島）と松島（現在の竹島）の島名を長崎に来日したシーボルトが帰国後1840年作成した「日本図」に重ねて発表したのが混乱が生じた。松陰は竹島のことを「万国地図」で知ったとしているが、一般的な世界地図のことか1855（安政2）年天文方山路諧孝が刊行した「重訂万国全図」のことか不明であるが、後者なら地図内にアルゴノート島即竹島、タゲレト島即松島として島名が表記されている。

また松陰は竹島開拓を蝦夷地開拓に重ね合わせて思考しているが、1845（弘化2）年から6回蝦夷地を調査し北海道の地名の命名者として知られ、同様に開拓すべき地として竹島を考えていた伊勢の松浦武四郎とも交流があった。吉田松陰の研究者である岸本覚氏はその論文<sup>6</sup>で松浦武四郎を「この松浦と吉田松陰、木戸孝允（桂小五郎）、大村次次郎の関係は親密である。とくに松陰が江戸にいた時期に島山新三郎宅に頻繁に出入りしていたことが知られており、明治初年には木戸・大村との交友があった。まさに、竹島開墾論の主導者と結びついていたのである。」と記されている。松浦武四郎自身もその安政元年の著「他計甚麼雑誌」の後記に「日本の有志の士がかの地（鬱陵島一筆者注）に渡り外国船と誠信を通じ世界の情勢を採知すれば得策となることこの上ない」と松陰等の竹島開拓を期待していた。松陰が認識していた竹島の具体像はこの松

<sup>6</sup> 岸本覚「幕末海防論と「境界」意識」、『江戸の思想』第9号、ペリかん社、1998年、58頁。

浦武四郎が「他計甚麼雜誌」を通じて情報を提供した島であったと想像されるが、その武四郎が引用した文献の中心にあげているのは、松江藩の蘭学者金森建策の「竹島図説」<sup>7</sup>である。

## 2 松陰の大坂島と竹島（竹嶼）

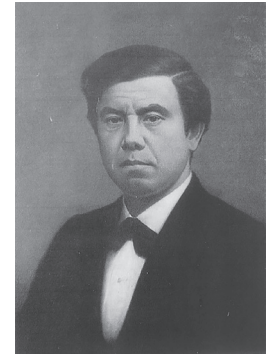
吉田松陰が記す大坂島を岸本覚氏は鬱陵島の大坂浦のことと考えておられるが、私は島であるから大坂浦の直近にある竹島（竹嶼）のことと推測している。そう考える別の理由は朝鮮王朝で鬱陵島検察使に任命された江原道出身の李奎遠（1833～1901）の出発を前に朝鮮国王高宗が、激励の言葉と共に「于山島、あるいは松竹島と呼ばれるものは、輿地勝覽に記述がある。それはまた松島、竹島とも呼ばれ、于山島と三つ合わせて鬱陵島と呼ばれる島を成している。全てについてその事情を検察せよ。」と指示し、1882年5月、鬱陵島に上陸し「鬱陵島検察日記」<sup>8</sup>に調査の記録を残すだけでなく鬱陵島内外を描いた地図を提出し、その内「鬱陵島外図」の方には、竹島（竹嶼）とわかる島を表示しているからである。島根県竹島問題研究会が平成19年3月に刊行した『竹島問題に関する調査研究 最終報告書』<sup>9</sup>内の論文には、歴史地理学専門の舩杉力修氏の「絵図・地図からみる竹島（Ⅱ）」も載るが、その「各種の「鬱陵島図」について」の項には1711年に鬱陵島に捜討官として渡った朴昌錫の「鬱陵島図形」も含まれるが、この図には「所謂于山島」と島の植生として「海長竹」という文字が竹島（竹嶼）に記されている。

松陰の大坂島が竹島（竹嶼）なら、江戸時代初期の竹島渡航の時、大谷、村川家から派遣された漁師達が上陸していたと大谷九右衛門の「竹嶋渡海由来記抜書」<sup>10</sup>や岡嶋正義の『竹島考』<sup>11</sup>の記録にいか島、イガ島、まの島、マノ島の島名で記されたり、古図に描かれている島だということになる。明治時代初期に鬱陵島が竹島、松島の一島二名か、竹島、松

島が別々の島かの論議が生じた時、明治13年軍艦「赤城」が派遣され現地調査をした結果、鬱陵島が松島で竹嶼が竹島であると結論づけ、明治政府がこの問題は「多年ノ疑義一朝水解セリ」と結論づけたこともある島である。

## 3 門下生桂小五郎（木戸孝允）の「竹島開拓建言書草案」

吉田松陰は世にいう安政の大獄で逮捕、処刑された。その翌年1860（万延元）年門下生桂小五郎と直接の門下生ではないが知己の関係にあった村田蔵六が連名で幕府に「竹島開拓建言書草案」を提出した。福本義亮著『吉田松陰大陸・南進論』の「松下村塾学徒の海外雄飛策謀」<sup>12</sup>の項に「松門の同志、村塾の盟友が、何れも師松陰先生の師説遺命を奉じて一塊の火の玉となり、これが実現化に心魂を捧げて国策樹立に邁進し」とあるが、桂小五郎と村田蔵六の行動はその端緒というべきものであった。『木戸孝允文書 第八』等に掲載の「竹島開拓建言書草案」<sup>13</sup>は長文なので要旨を記すと、「竹島は長門国萩より東北の海上約五十里にあって朝鮮から竹島までとほぼ等間隔にある」、「最近外国船がこの島周辺に現れるようになったので、日本人が植民して国防にあたる必要がある」、「島には日本人が建てた人家が5、6軒はあると聞いている」、「この島はかつて朝鮮国になったという風聞もあるが、朝鮮人の渡海は皆無である」、「世界地図を見ると日本と同じ色に着色され、島名も「タケエイ・ララド」と記され日本の属島と認識されている」等と説明されている。「タケエイ・ララド」は日本語の竹と英語のアイランドを連結した造語と思われるが、二人の文章には鬱陵島は竹島という言葉だけで表現されている。この願書は藩主を通じてのものでないとして閣老久世広周によって却下された。



桂小五郎（木戸孝允）  
（山口県立山口博物館所蔵）

12 福本義亮「松下村塾学徒の海外雄飛策謀」、『吉田松陰 大陸・南進論』所収、誠文堂新光社、1942年、373頁。

13 前掲註5。

7 金森建策「竹島図説」、『外務省記録 竹島関係文書集成』、エムティ出版、1996年、1～30頁。

8 「啓草本」（韓国東国大学所蔵）、李正煥編『晩隠、李奎遠『鬱陵島検察日記』』所収、2006年（島根県竹島資料室所蔵）、192～199頁および225～229頁。

9 竹島問題研究会『竹島問題に関する調査研究 最終報告書』（第1期 最終報告書）、2007年。

10 大谷九右衛門「竹嶋渡海由来記抜書」、『岡嶋家資料』（写本（1868年以降筆写されたもの））所収（鳥取県立博物館所蔵）。

11 岡嶋正義「竹島考」、『岡嶋家資料』所収、1828（文政11）年（鳥取県立博物館所蔵）。